ちょっとそこまで ～お散歩日和（地域編）～

深山合笑

天鈿女命（あめのうずめのみこと）様が招霊（おがたま）の木の枝を手に持ち舞をされ、其の回りで他の神々で騒ぎ立てます。すると、天岩戸（あまのいわと）の中の天照大御神（あまてらすおおみかみ）様は「太陽の神である自分が隠れて居るから外は真っ暗で、みんな困って居るはずなのに、外ではみんな楽しそうに騒いでいる。これはどうした事か？」と不思議に思われて天岩戸（あまのいわと）の扉を少し開けて外を御覧になられます。

神々は、騒いでいる理由を伝えます。

「あなた様より美しく立派な神がおいでになりました。」

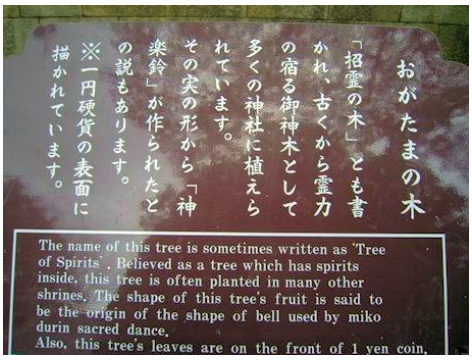
「お連れ致します。」

と言い、鏡で天照大御神（あまてらすおおみかみ）様の顔を写しました。

自分の顔だと分からなかった天照大御神（あまてらすおおみかみ）様は、もう少しよく見てみようと扉を開いて体を乗り出しました。

その時、思兼神（おもいかねのかみ）様が天照大御神（あまてらすおおみかみ）様の手を引き、岩の扉を手力男命（たぢからをのみこと）様が開け放ちまして天照大御神（あまてらすおおみかみ）様に天岩戸（あまのいわと）から出て頂くことが出来ました。

これは、宮崎県高千穂町の天岩戸神社に伝わる天岩戸神話の一節をホームページから引用したものです。



ここで、注目して欲しいのが「招霊（おがたま）の木」です。モクレンの仲間ですが、常緑樹なのが他と大きく異なる点です。

また、造幣局は否定していますが、１円玉に描かれた若木のデザインは、このオガタマノキだという説が流布しています。確かによく似ていますし、京都の石清水八幡宮のご神木であるオガタマノキの解説にも明記されているのは、我田引水の香に満ちていて愉快です。

個人的な話になりますが、天鈿女命は、筆者が記憶している、人生最初に観た映画「日本誕生」（１９５９年）で強烈に覚えているシーンの１つです。後にそれを演じたのが乙羽信子だと知ることになりますが、それよりも、当時一番の人気者だった柳家金語楼が出演していたことが記憶に残った最大の理由のような気もします。

この映画で後々まで長く夢に出てくることになったのは、大勢の兵士たちが溶岩流に飲み込まれるシーンです。子供心に抱いた恐怖心は相当なものだったようです。三船敏郎の主演作です。

ついでに触れると、この天鈿女命は、手塚治虫の「火の鳥黎明編」にも、主人公である猿田彦と結ばれる醜い姿のウズメとして登場します。しかし、その正体は…。

いつものことながら、前置きがじつに長い。長過ぎるとお思いでしょうね。申し訳ない。やっとここで本題に入ります。

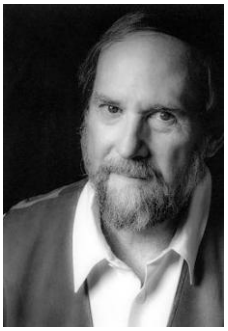
「深山含笑」と聞いて、何を思うでしょうか。山深い場所に迷い込んで途方に暮れていると、突然目の前に陽光を受けて真っ白に輝く花を見出し、思わず感嘆の笑みをこぼす、そんなイメージでしょうか。斉藤隆介の「花さき山」を想起する世界です。

「深山含笑」からは教訓じみた四字熟語を連想するかもしれませんが、これは植物の名前です。「ミヤマガンショウ」と言います。冒頭から触れてきたモクレン、しかも常緑樹であるオガタマノキの仲間です。オダタマノキよりも白い花の大きさが２倍以上大きく、その様子はモクレンそのものです。違いは、常緑樹なので、葉がびっしりと茂っていることですが、他に、花弁の枚数がモクレンが６枚なのに対して、ミヤマガンショウは９枚もあります。あとは、花の香りの強さでしょうか。歩道を歩くと分かりますが、とても甘い香りが周囲に漂い、クチナシやキンモクセイ級です。

この写真から、場所はお分かりだろうと思います。交通局光ヶ丘庁舎と光が丘消防署の間にある植え込みです。計７本のミヤマガンショウが今が盛りと花を咲かせています。

花を終えた実の様子を見ると、コブシやモクレンの仲間だなと合点が行きます。

この実の姿から、巫女が神事で舞う時に使う神楽鈴が生まれたという話を聞いたこともありますが、後付けのような気がします。それよりも、同じモクレンの仲間であるコブシの名前が「実の形が握りこしに似ているから」という由来の方が人間的で真実味があります。ものはついでということで、モクレンとコブシの実も紹介しておきましょう。

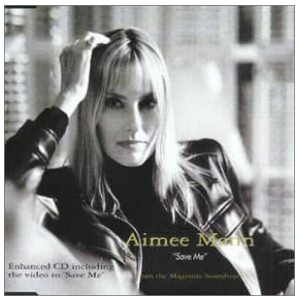


ここで、学名「ミケリア・マウダイエ」について触れておきます。いずれも人名です。「ミケリア」は、イタリアの植物学者ピエール・アントニオ・ミケーリ（写真左）にちなんで、モクレン科オガタマノキ属に献名されました。また、「マウダイエ」も、イギリスの植物学者スティーブン・ダン（写真右）が妻モードに敬意を表して使用したものです。この辺りになると、牧野富太郎が妻の名前を使った「スエコザサ」とか、シーボルトの「オタクサ」と共通する発想です。世間は愛の証だとか言っていますが、案外、命名のネタ切れが原因なのではないかという穿った見方もしてしまいそうです。

ここからは再び脱線をお許しください。映画「マグノリア」をご存知でしょうか。マグノリアとはモクレンのことですが、残念ながらストーリーは全くそれとは関係がありません。９人の物語が展開する大通りの名前というだけの理由です。

この９人はそれぞれに何らかの過ちを犯した者たちばかりで、子供を捨てる、盗みを犯す、嘘をつく、麻薬中毒…、そうした状況が好転するどころか悪化の一途をたどり、いよいよ二進も三進もいかなくなったラスト、信じられない事態が巻き起こります。それが、空から大量の、それも尋常ならざる数の蛙が振ってくるというパニック現象で、このために、それまでの全てがもうどうでもよくなってしまうという話です。まあ、とにかく一体どうやって撮影したのだろうかと、そっちの方が気になって仕方のない映画でもありました。まあ、１９９９年の放映ということや、アメリカが動物虐待については非常に敏感であることを考えれば、当然ＣＧを駆使しているのでしょうが、それにしてもリアルで、しかもあまりにも唐突に意表を突かれたために、ただただ驚いたことをよく覚えています。

トム・クルーズが男性向けセミナーのマッチョ講師役で出てきますが、「M. I.」や「トップガン」のイメージと違って、演技そのもので魅せてくれます。父親との再会シーンは圧巻です。しかし、残念ながら蛙のインパクトには負けます。



エンディングで、エイミー・マンの歌う「SAVE ME」が流れてきて、この映画のテーマがやっと見えてきます。そうなのか、誰もが皆、後悔の先に救いや赦しを求めているのかと。この歌のＭＶもよくできていて、映画の製作と並行して作られていたことが分かります。監督・脚本のポール・トーマス・アンダーソンは、彼女の「deathly」にインスパイアされてこの映画を作ったと言っていますから当然かもしれません。

（終）